ひたちなか市の歴史を訪ねて

Visit the History of Hitachinaka

問い合わせ先

ひたちなか市教育委員会総務課文化財室

ひたちなか市東石川２丁目10番１号
TEL 029-273-0111（内線 7308，7309）
FAX 029-274-2430

平成28年３月 発行

ひたちなか市の歴史を訪ねて

Visit the History of Hitachinaka

ひたちなか市教育委員会

ひたちなか文化財マップ

文化財

護り継ぐべき財産

私たちの住むひたちなか市には，これまでの先人の歩んできた歴史を語る数多くの文化財が遺され，自然環境の賜物ともいえる文化財も所在しています。

文化財とは歴史的や文化的に価値が高いものや人々の生活の推移を理解するのに必要な有形・無形の文化的遺産を総称したものです。

市内には有形文化財27件，無形文化財２件，民俗文化財９件，記念物28件の合計66件の指定文化財があります。

これら市民の財産とも言うべき文化財のいくつかを訪ねて，市の歴史をたどってみたいと思います。

時　代	文化財名	ページ
旧石器時代	❶ 武田西塙遺跡	3
縄文時代	❷ 後野遺跡	4
	❸ 三反田蜆塚貝塚	5
弥生時代	❹ 東中根遺跡群	6
古墳時代	❺ 虎塚古墳	7
奈良時代	❻ 十五郎穴	8
平安時代	❼ 武田氏館	9
鎌倉時代	❽ 多良崎城跡	10
江戸時代	❾ 貪賓閣跡	11
	❿ 比観亭跡 ⓫ 水門帰帆 ⓬ 観涛所	12
	⓭ 那珂湊反射炉跡	13

旧石器時代

文化財マップ ❶

武田西塙遺跡（たけだにしはなわいせき）

県内最古級の狩猟具

今から約3万年前の地球は，陸上の大部分が氷に覆われる大変寒冷な気候でした。この頃の海水面は今より約100m低く，波打ち際は現在よりも遥か沖にあったとされてます。食料となる動物や植物は，今とは異なり容易に確保できるものでもなく，人々にとっては生き抜くのに厳しい状況でした。

このような過酷な環境のなか，人々は石を加工して様々な道具を作り出し，狩猟で何日もオオツノジカやナウマン象などの動物を追いかけるなどして，たくましく生き抜いてきました。この時代は旧石器時代と呼ばれています。

ひたちなか市では，そのような時代を生きた人々の生活の痕跡である石器が，火山活動により降り積もった火山灰である赤土（ローム層）の中から，発掘調査によってたくさん出土しています。なかでも堀口小学校近くにある武田西塙遺跡や那珂湊中学校近くにある半分山遺跡から出土した打製石器（ナイフ形石器）は，県内最古級の石器資料に位置づけられてます。大変細かく加工されていて，棒などに装着して槍として狩猟用に使用されたり，狩猟で仕留めた動物を解体するための刃物として使用されていました。

武田西塙遺跡出土ナイフ形石器
（左がメノウ，右が珪質頁岩で作られている）

縄文時代

文化財マップ ❷

後野遺跡（うしろのいせき）

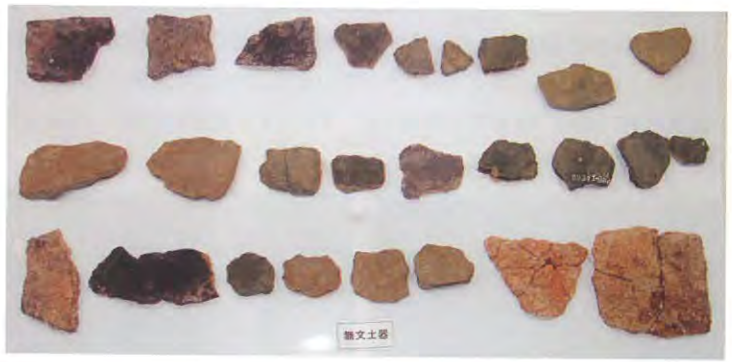
日本最古期の土器　～ 縄文時代（新石器時代）のはじまり ～

旧石器時代の寒冷な気候が温暖なものになるにつれて，植生や動物相も変化していき，多種多様な食材が食べられるようになるとともに，土器が発明されました。土器は，粘土を材料として容器の形に作った焼物で，人類の生活文化の上で画期的なことでした。

食材を調理する方法は，それまで焼いたり蒸したりしか出来ませんでしたが，土器を使い煮炊きをすることで，人々の食生活はより豊かなものとなっていきました。また，土器の使用は人類の文化を飛躍させる最初のきっかけとなり，革新的な出来事でした。

後野グラウンド近くにある後野遺跡では，昭和50年に当時の中学生が石器を見つけたことがきっかけで発掘調査が実施され，日本で最も古い時期にあたるとされる無文の土器が，石器と共に検出されました。この時期の土器が出土した遺跡は全国で数箇所しかなく，関東地方ではひたちなか市のみで，大変貴重なものであり，専門誌や日本考古学協会で発表されたほか地元紙にも大きく取り上げられ，話題となりました。

土器にはやがて縄目の文様が施されるようになり，それにちなんでこの時代は縄文時代と呼ばれるようになりました。



後野遺跡出土土器

縄文時代

文化財マップ ③

三反田蜆塚貝塚

縄文時代のタイムカプセル

縄文時代になり定住生活をするようになると，食べ終えた貝殻や動物の骨などを一定箇所に捨てるようになり，これら貝殻などが堆積したものを貝塚といいます。初期の貝塚は使われなくなった住居跡などの窪地に堆積する小規模なものでしたが，次第に台地の斜面などに捨てるようになり，これが長い時間をかけて堆積することで，やがて大規模な貝塚が形成されるようになっていきました。通常，土壌は酸性のため動物の骨などは残りにくいのですが，貝塚では貝殻のカルシウムにより土壌がアルカリ性に保たれるため骨が残ります。

このため，貝塚からは当時食べられていた動物や魚介類の骨などが見つかると同時に，埋葬された人骨も見つかっており，当時の暮らしぶりを閉じ込めたタイムカプセルとも言え，大変貴重なものです。

縄文時代は現代より温暖な気候であり，そのため海水面が現在よりも約5m高く，台地の斜面部付近に多数の貝塚が残っています。なかでも，ひたちなか海浜鉄道湊線中根駅の西方に位置する三反田蜆塚貝塚は，那珂川下流域において最大級の規模であり，明治20年に報告されて以降幾度にもわたり発掘調査が行なわれ，多数の埋葬された人骨とともに，住居跡などの遺構や様々な遺物が検出されました。人骨のなかには当時の装飾品である貝輪を腕に装着した状態で残されていたものもあり，大変貴重な資料です。

貝塚を構成している貝殻の多くはヤマトシジミで，そのほかカキやハマグリ，クボガイなどであり，現在でも那珂川河口付近や市域の海岸で棲息している貝類が採集されていたことがうかがえます。貝殻のほかにも猪や鹿，また様々な魚の骨も残っており，土器や石器，猪の牙や鹿の角などで作られた当時の道具なども見つかっています。さらには全国的にも珍しい埋葬されたとみられるオジロワシの骨や，鳥型土製品など，鳥に対する信仰を考察するうえで貴重な資料も検出されており，様々な面から重要な遺跡です。

三反田蜆塚貝塚出土骨角器および貝輪

三反田蜆塚貝塚出土鳥型土製品(左)と鳥型把手(右)

弥生時代

文化財マップ ④

東中根遺跡群

約1800年前のお米の出土と保管方法

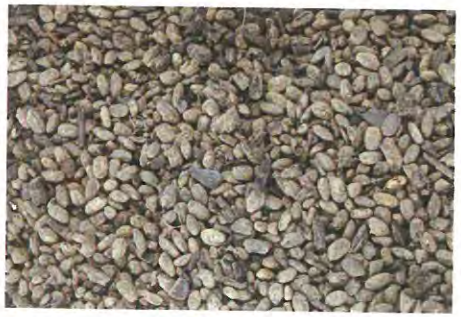
縄文時代は，狩猟や漁労などで採集できたさまざまな食材を土器を使って調理していました。ドングリなどの木の実で作られたクッキー状の食べ物が見つかった遺跡もあります。

やがて水田稲作の技術が中国大陸から伝わると，水田は焼畑よりも収穫量が多く，お米を蓄えられるようになるため，人々の暮らしは安定して豊かになっていきました。この時代は弥生時代と呼ばれていますが，その由来は明治17年に東京の弥生町（現東京都文京区）で発見された土器を弥生式土器とし，そのまま時代の呼び名にしたことによります。

市内における弥生時代の遺跡として代表的なものに中根小学校南側に位置する東中根遺跡群があります。この遺跡群は「野沢前遺跡」「堂山遺跡」「清水遺跡」「大和田遺跡」などからなり，約1kmの範囲で所在します。

大和田遺跡では発掘調査によって，弥生時代後期の住居跡5基が確認され，様々な土器や紡錘車（糸をつむぐ道具）など，当時の生活をしのばせる貴重な品々が出土しました。また，同時に炭化した木材が多数出土しており，火災があったことをうかがわせます。そのうちの1基の住居跡床面の4分の1を覆うような状態で約3ℓのお米が出土しました。そのお米は籾の状態で炭化していました。これらの状況から，当時は籾を布袋などに入れて，ネズミなどの害を防ぐため天井などに吊るすなどして保管していて，住居が燃えた際に落下し散乱したものと考えられました。

この遺跡からの出土資料は，当時の籾の保管方法が分かるなど，人々の暮らしの様子を伝えてくれる大変貴重なもので，埋蔵文化財調査センターで見ることが出来ます。



東中根遺跡出土炭化米

東中根遺跡出土弥生式土器

古墳時代

文化財マップ ⑤

虎塚古墳

虎塚古墳の不思議

市内には古墳が多数存在し，なかでも中根小学校近くに所在する前方後円墳の虎塚古墳は，彩色壁画で全国的に有名です。虎塚古墳は，古墳時代の終末期（7世紀初め頃）に築造された古墳で，亡骸を納める横穴式石室には色鮮やかな壁画が描かれてます。石室は灰色の凝灰岩で出きており，石室内表面に白色粘土で下塗りを施したことで，酸化鉄の赤色顔料（ベンガラ）により描かれた文様を鮮やかに際立たせています。

描かれている文様で最初に目に飛び込んでくるのが，奥壁に描かれた2つのドーナツのような環状文です。大きさは直径約35㎝で，コンパスを使い正確に円を描き中心部分約10㎝を残して彩色されてます。環状文のすぐ上には三角をつき合わせたような文様があり，さらに天井付近にはのこぎりの歯のようなギザギザの文様（連続三角文）が描かれています。この文様は，東西の壁天井付近にも描かれています。これら丸や三角の文様は，死者を悪霊から守るための魔除けの意味合いがあるのではないかと言われています。

また，壁画には多数の武器・武具と馬具類なども描かれています。丸や三角の文様が丁寧に描かれているのに対して，こちらはフリーハンドで描かれており素朴な図柄になっています。

通常，古墳からは鉄製品などの多くの副葬品が出土しますが，虎塚古墳では，わずかな小大刀などの副葬品が残されていました。実物の副葬品が少なく，副葬品として使用されそうなものが壁画に描かれていることや，幾何学文様の意味など不明な点もあり諸説が唱えられています。発見から40年以上経った今なお，虎塚古墳は不思議に満ちて私たちを引きつけています。

昭和49年（1974）年1月に国の史跡に指定され，昭和55年秋に公開保存施設が完成しました。それ以降，壁画の保存に影響を及ぼさないように保存状況を観察しながら，春（4月上旬頃）と秋（11月上旬頃）に壁画の一般公開を行っています。

虎塚古墳石室壁画

虎塚古墳外観

奈良～平安時代

文化財マップ ⑥

十五郎穴

日本最大規模の横穴墓群

古墳時代に成立した中央の王権が，日本の各地に支配力を広げていくなかで，中国の政治制度などを取り入れながら次第に法律によって国家を運営する律令国家へと体制が整えられ，地方には位の高い貴族などが国司（地方を治める役人）として中央から派遣されてきました。このころ都が奈良に置かれたことからこの時代を奈良時代と呼んでおります。

この時代に中央から地方へ派遣された役人や地元の有力者やその家族が亡くなると崖面に横穴を掘って造られた墓（横穴墓）に埋葬されました。市内には奈良時代の横穴墓はいくつかありますが，最大規模を誇るのは，虎塚古墳のある東中根台地の崖面につくられた「十五郎穴横穴墓群」です。十五郎穴横穴墓群は，虎塚古墳のある台地縁辺部を含めて谷津を挟んで3つの支群から構成され，北から指渋支群（埋蔵文化財調査センターのある台地），館出支群（茨城県指定史跡に指定された横穴墓のある台地），笠谷支群（東中根台地南端）と呼ばれております。古くから既に開口した墓もあり，江戸時代水戸藩の学者小宮山楓軒の「水府志料」にも昔の墓であるとの記述があり，存在が知られていたようです。

このうち館出支群にある34基は開口した穴が密集しており，昭和15年に県指定になっています。また，昭和50年代には指渋支群の一部が明治大学により発掘調査され，119基の横穴が確認されました。

昔から十五郎穴は，300基は存在するだろうと推測されており，全体の基数及び範囲を確認するため，平成19年度より確認調査を実施しております。平成20年度の調査では，北限の横穴が確認され指渋支群は122基となりました。22年度からは試掘調査も行なっており，館出支群から未盗掘の横穴が新規に発見され，23年度に発掘調査を行ないました。その結果，玄室から金銅製金具のついた刀子と県内2例目となる蕨手刀が出土しました。この刀子は類例が正倉院御物にしかない大変珍しいもので，発掘調査で出土したのは日本で初めてのことで，大変貴重な発見です。玄室からは，人骨数体と鉄鏃19点，鉄釘144点が発見され，墓前域及び羨道部からは須恵器の高坏などが合計57点出土しました。これらの出土品から，この横穴は奈良時代に使用されていたことがわかりました。

十五郎穴館出支群

十五郎穴指渋支群

平安時代

文化財マップ ⑦

武田氏館

甲斐武田氏の発祥

奈良時代は約80年続きましたが，延暦13年（西暦794年）に平安京に遷都されてから平安時代が始まり，以降鎌倉幕府成立まで平安時代は約400年間続きました。今回は，平安時代末期の甲斐武田氏発祥の地のいわれについてお話しします。

平安時代後期，奥州（東北地方）には朝廷（天皇を中心とした中央政権）に反抗する勢力があり，朝廷は永承６年（1051年）に相模守（現在の神奈川県地域を治める国司）源頼義を陸奥守（現在の福島・宮城・岩手・青森県地域を治める国司）と鎮守府将軍（東北地方防衛の将軍）に任命して，反抗する勢力を討伐させることとしました。

頼義は長子である八幡太郎義家や在地の豪族らの協力を得ながら，13年をかけて奥州を平定しました（前九年の役）。頼義亡き後，永保3年（1083年）奥州で地方豪族同士の争いがおこり，義家はこれに参戦し，弟の新羅三郎義光らとともに乱を平定しました（後三年の役）。

義光は戦の後，常陸介（常陸国の国司）に任ぜられましたが，在任中に長子である義業を久慈郡佐竹郷（現在の常陸太田市）に配置し，三男の義清を那賀郡武田郷（現在のひたちなか市武田）に配置しました。義清は武田の地にちなみ武田氏を名乗り，武田氏が誕生することとなりました。

義清は長子清光とともに勢力拡大を図るなかで行き過ぎた行為があり，そのことを知った当時の常陸介の藤原盛輔から朝廷に告発されてしまい，大治５年（1130年）に甲斐国に移封になりました。義清から下ること17代後には有名な戦国武将の武田信玄（晴信）が誕生しています。

義清・清光父子らが常陸国武田の地に居を構えた館跡は，明治時代の鉄道の開通や戦後の開発により破壊されてしまいほぼ消滅しておりますが，付近には湫尾神社や，当時の様子が伺える史料（一遍上人絵伝など）をもとにして建造された武田氏館があり，往時を偲ばせています。

武田氏館では，武田氏発祥の資料や鎧・刀・武田遺跡群出土品など展示しております。

武田氏館

義清・清光の武者人形

鎌倉～室町時代

文化財マップ ⑧

多良崎城跡

中世の代表的な城館跡

平安時代末期，源氏に代表される武家が地方で勢力を延ばし，それまで主従関係にあった公家などの貴族と力関係が逆転していき，1192年源頼朝が征夷大将軍に任命され，武家政権の時代が始まりました（鎌倉幕府の成立の時期については諸説あります）。武家政権は源頼朝の鎌倉幕府以降，足利将軍の室町幕府，そして徳川将軍の江戸幕府と続きます。

鎌倉時代は幕府が家臣である御家人たちの土地を安堵し，戦があった場合敵方の領地を御家人に褒美として与えることで，幕府と御家人の信頼関係が成り立っていました。ところが1274年と1278年の元寇では，敵が海外の国であるため御家人に恩賞としての土地を与えることが出きず，次第に幕府と御家人の間に深い溝を生むきっかけとなりました。

さらに鎌倉時代末期になると幕府を倒す動きが出てきて，ついに1333年幕府の御家人の足利尊氏らによって鎌倉幕府は倒されました。足利尊氏は1338年に征夷大将軍に任命され，京都の室町に幕府（室町幕府）を開き室町時代が始まりますが，室町時代の始まりのころは，天皇が二つの系統に分かれて（これを南北朝といいます）全国的に争いが多く，常陸国も小田氏，常陸大掾氏などの南朝方と佐竹氏を中心とした北朝方が対立して南北朝の戦いの激しい土地でした。

市営高野墓地付近の大字足崎にこの時代の城館跡である「多良崎城跡」が所在しています。現在では水田を見下ろす台地上に位置していますが，もとは真崎浦と呼ばれた沼地が広がっており，天然の要害として適した地であったと考えられています。近年の研究によると，この城は鎌倉時代末期に，常陸大掾氏一族である吉田里幹の後裔が築城したとされていますが，南北朝の騒乱で南朝方についた常陸大掾氏一族は没落してしまい，その後には北朝方についた那珂氏系の足立氏が多良崎郷の地頭となったようで，騒乱の内に支配者が入れ替わるなど争いの激しさが伺えます。また，足立氏については南北朝の騒乱が記録された「太平記」によると，足利尊氏の重臣である高師泰の軍に加わり勇猛な家臣として評価されていたようです。

多良崎城跡は数百年経った現在でも残存状態がよく，虎口（入り口），本郭，土塁，掘り切，二の郭，三の郭，木戸跡，隅櫓跡などがほぼ完全な姿で残っており，当時の築城様式を知るうえで重要な城跡であるため，昭和50年に市の史跡に指定を受けました。

多良崎城跡

文化財マップ⑨

賓賓閣跡

水戸藩主の別荘（別邸）

江戸時代以前に常陸国を支配していたのは佐竹氏でしたが，江戸時代には徳川氏が水戸に入り，水戸藩第2代藩主には「水戸黄門」で有名な光圀が就任しました。佐竹氏の時代から那珂湊には「御殿」と呼ばれた別邸が現在の湊中央一丁目あたりに存在していましたが，光圀の晩年である元禄11年（1698年）に現在の湊公園に新たに建設され，儒教の「尭典」から言葉を選び「賓賓閣」と名づけられました。賓賓とは謹んで客人を迎えるとの意味があります。

賓賓閣は，水戸藩主の別荘としての役割のほか，その名の示すとおり客人を迎える場としての役割を果たしていました。久昌寺（常陸太田市）の住職「日乗上人」の日記によると，光圀が御殿入りする際に，久昌寺を始め華蔵院（市内）や願入寺（大洗町）等の住職や水戸藩の家臣が招かれ，歌詠みの会や酒宴が催されていたことが伺えます。また，賓賓閣には海防役所としての機能があったようで，異国船発見の際は，湊村（旧那珂湊市の中心街など）をはじめ周辺の村の中で選ばれた者1名が，御殿へ詰めて海防に勤めるよう達しが出されていることが「湊村御用留」（庄屋などの村役人が藩から承った御用などを記録したもの）などから伺うことができます。

客人を招く場としてや海防役所としての機能を果たしてきた賓賓閣ですが，水戸藩最大の内乱である元治甲子の乱（1864年）で焼失してしまい，その跡地は明治30年に湊公園として整備され，一般に開放されるようになりました。湊公園内は，昭和43年に市の史跡「賓賓閣跡」に指定され，光圀時代に植えられた樹齢300年の松木は「湊御殿の松」として，昭和46年に市の天然記念物に指定を受けています。

賓賓閣とその庭園の様子については，江戸時代に描かれた絵図の写しが残っており，正門や竹垣をはじめ御殿の敷地内の様子を伺い知ることができます。文字による記録として第9代藩主斉昭に登用された農学者長島尉信が，天保10年（1839年）に賓賓閣を訪れた際の記録が残されています。これによると20畳敷の御座間や御寝所をはじめ御小姓部屋や御医師部屋など，大小30以上の間取りで構成されているのが伺えます。

湊御殿の松

文化財マップ⑩

比観亭跡

文化財マップ⑪

水門帰帆

文化財マップ⑫

観涛所

水戸藩の景勝地　「比観亭跡」「水門帰帆」「観涛所」

江戸時代の那珂湊には水戸藩の別邸「賓賓閣」があったこともあり，歴代水戸藩主はしばしばこの地を訪れていました。その際，別邸を出て平磯や磯崎まで足を延ばすことがあったようです。今回はそれぞれの景勝地のエピソードについて紹介します。

第6代藩主治保が寛政2年（西暦1790年）に酒列磯前神社の神主の屋敷を訪れた際，屋敷東方の高台から海岸風景を眺めたところ，眼前に広がる大海原と白砂青松の眺望が素晴らしかったため，この高台に日よけの四阿を建てさせ「比観亭」と名づけました。四阿建物は現在は残っていませんが，「比観亭」のあった場所からは，晴れた日には東海村方面に続く阿字ヶ浦の白い砂浜と松の木々を望むことができます。

第9代藩主斉昭は，水戸藩内8箇所の景勝地を「水戸八景」とし，船運で栄えた那珂湊の帆掛け舟が出入りする那珂川河口の風景を「水門帰帆」に選定し，河口の台地突端付近に碑を建てさせました。碑は現在でも残っており，ここからは鹿島灘から筑波山まで見渡せ，広々した眺望を楽しむことができます。なお，当時の那珂川は，大きく蛇行して碑のある台地の下を流れており，白い帆の出船・入船を間近に見ることができました。

また，斉昭は平磯町にある海を臨む高台の一角を，波涛を鑑賞する場とし「観涛所」と名づけて碑を建てさせました。『平磯町六十五年史』には「観涛所」に関する逸話が紹介されています。それによりますと，「彫金職人の名工が刀の鍔に見事な波の景色を表現し，それを斉昭が賞賛し彫金職人に想像図か写生か訊ねると，平磯町の台地から眺めた波の景色であることが分かり，現地に行ったところあまりにも景色が素晴らしかったため，絶賛して観涛所と名づけた」とのことです。「観涛所」の碑は風化が激しかったため，昭和10年に平磯町により碑覆堂が建てられ，保護されてきましたが，碑覆堂は，平成23年3月の東日本大震災により倒壊してしまいました。眼下には，木々の間から岩に砕ける波しぶきを眺めることができます。

比観亭跡からの景色（阿字ヶ浦海岸）

水門帰帆

文化財マップ⑬

那珂湊反射炉跡

水戸藩第９代藩主斉昭の国防「那珂湊反射炉跡」

江戸時代，幕府は鎖国を続けてきましたが，末期になると日本近海に外国の船が出現するようになってきました。幕政参与徳川斉昭（水戸藩第９代藩主）は外国に対し強い警戒心を抱き，那珂湊をはじめ水戸藩内の海岸の防備に力を注ぐことを考え，大砲を鋳造することになりました。

当初，水戸藩では青銅製の大砲を鋳造していましたが，藩内の銅が枯渇しかつ対外国船攻撃に適した鉄製の大砲を製造する必要があったため，西洋の金属溶解炉である反射炉を建造することになりました。西洋式の採鉱，精錬技術に詳しい南部藩の学者大島高任（たかとう）を招き，西洋の技術書を和訳させ，那珂湊の大工飛田与七にも命じて２基の反射炉を作らせ，安政４年（西暦1857年）に完成しました。反射炉の建設には，千数百度の高温に耐えられる耐火煉瓦（れんが）が必要で，栃木県那珂川町小砂（こいざご）の粘土などが使用されました。反射炉の建造に平行して太平洋沿岸の台地上に砲台である台場を築造し，台場近くに異国船を監視する番所も設置しました。

幕末の日本で最初に反射炉を建設したのは，嘉永３年（1850年）の佐賀藩ですが，水戸藩では，先行して反射炉を建設した諸藩の技術を導入して進められ，外国に対する防備に斉昭が心を砕いていたことが伺えます。那珂湊反射炉で鋳造された大砲は，柳沢の水車場で砲身をくり貫いて完成させ，台場に設置されたほか，幕府にも献上されました。

国防に力を注いだ斉昭でしたが，「安政の大獄」（1859年）で永蟄居（えいちっきょ）となり，大砲の鋳造も一時中断してしまいました。その後文久２年（1862年）に大砲鋳造が再開され，元治元年（1864年）まで約20門の大砲が鋳造されました。

斉昭は万延元年（1860年）に亡くなりましたが，斉昭亡き後の水戸藩内は尊皇攘夷派と保守派が分裂して争い，元治元年（1864年）水戸藩最大の内乱である天狗党の乱が勃発し，反射炉は破壊されてしまいました。

現在，那珂湊反射炉跡には，昭和12年に地元の有志によって建造当時のレンガを一部用いて復元された反射炉が残されており，往時の姿を偲ばせています。

那珂湊反射炉跡

文化財マップ⑭

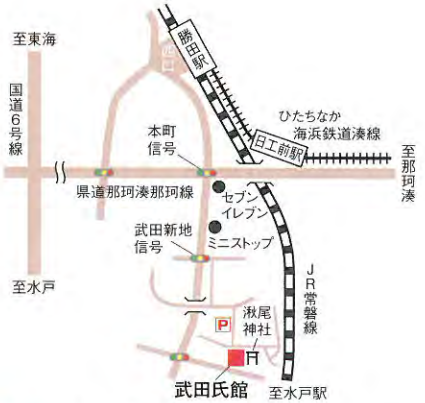
埋蔵文化財調査センター

市内の埋蔵文化財の調査研究や資料の収蔵をする施設。市内出土の考古学資料や虎塚古墳壁画の模型等を展示。考古学等の講習会，大学生の博物館実習も行っています。講習会の申込み案内等は，ひたちなか市報でお知らせしています。

- 開館時間　午前９時から
  午後５時（入館は４時30分まで）
- 休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
  年末年始
- 問い合わせ　TEL 029-276-8311
  ひたちなか市中根 3499

文化財マップ⑦

武田氏館



武田地区は，甲斐武田氏の発祥の地であり，これを広く世間に知らせるために整備された施設。鎌倉時代の地方豪族の館（住居）を再現。

主屋は主殿造で，厩，納屋を整備し，主屋には甲斐武田氏発祥の関係資料等を展示。

- 開館時間　午前９時から
  午後５時（入館は４時30分まで）
- 休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
  年末年始
- 問い合わせ　TEL 029-276-2525
  ひたちなか市武田 566－2